

海から見るアメリカ史の可能性と課題：

笠井俊和著『船乗りがつなぐ大西洋世界 ——英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』

(晃洋書房、2017年)

を読む

遠藤泰生

海の歴史の可能性を研究者が頻りに議論している。現在にまで続く海の歴史のブームがいつ始まったのか、研究者によって見解は異なるだろう。しかし、国民国家の枠を越えたグローバル・ヒストリーの潮流が高まるなか、国境の制約を受けにくい海の歴史への関心がこれからさらに強まることは間違いない。例えば、金澤周作編『海のイギリス史』(2013)や小島毅監修『東アジア海域に漕ぎ出す 全6巻』(2013~2014)、羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』(2017)、田中きく代他編『海のリテラシー』(2017)などに収録された諸論文を読めば、そのことは明らかである。¹⁾

アメリカ合衆国史の研究においても海への関心が顕著になってきた。2018年12月22日に東京で開催された日本アメリカ史学会の例会パネル「植民地時代史の新潮流」に、今回取り上げる著書を著した笠井俊和が登壇したのも、その証左の一つである。²⁾ 2017年度アメリカ学会の清水博賞を受賞した本書の学術的な意義は、別の専門学術誌でも議論される予定と聞く。³⁾ そこで、ただその内容の優れた点をまとめるだけでなく、本書から見える「海のアメリカ史」の今後の可能性と課題を考えることに目的をおいて、以下論評を加えてみたい。

1. アメリカ史学界における「海」への関心

本書の内容の検討に入る前に、アメリカ合衆国の史学界における「海」への関心の高まりを簡単に振り返っておきたい。本書の意義を考えるのに必要な史学史的背景を確認する

¹⁾ 金澤周作『海のイギリス史——闘争と共生の世界史』(昭和堂、2013年); 小島毅監修『東アジア海域に漕ぎ出す 全6巻』(東京大学出版会、2013~2014年); 羽田正『グローバル・ヒストリーの可能性』(山川出版、2017年); 田中きく代・阿河雄二郎・金澤周作編『海のリテラシー——北大西洋海域の「海民」の世界史』(創元社、2016年)などヨーロッパ史における海の歴史の成果を取り入れた論集が近年盛んに刊行されるようになった。

²⁾ 日本アメリカ史学会2018年12月例会。http://www.jaah.jp/を参照のこと。

³⁾ 例えば、『西洋史学』と『アメリカ研究』が書評の掲載を予定している。他に、『七隈史学』(20号、2018年)が書評を掲載した。

作業にそれはなる。

ヨーロッパ史の研究における海への関心を議論するのであれば、例えばフェルナン・ブローデル (Fernand Braudel) の『フェリペ二世治下の地中海と地中海時代 (*La Méditerranée et le Monde Méditerranéen à l'époque de Philippe II*)』(1949) を起点に史学史のおさらいをするのが一つの定式になっている。しかし、アメリカ合衆国の史学界で現在のように海への関心が高まったのは、1990年代以降のことと理解してよい。言うまでもなく、伝統的な海事史——海戦、捕鯨、貿易の歴史など——の研究は19世紀以来連綿と続けられてきたわけだが、分析の単位としての海、すなわち陸の歴史にはない魅力を備えた分析の対象としての海への関心が高まったのは、やはり1990年代以降のことと考えられる。上述のフェルナン・ブローデル著『フェリペ二世治下の地中海と地中海時代』(1949)の英訳がカリフォルニア大学出版局から1996年に刊行されたことも、その高まりと無関係ではなかったろう。⁴⁾

史学界における海への関心の盛り上がりにもかかわらず、アメリカ合衆国歴史学協会 (American Historical Association) が「海 (oceans)」を年次大会の共通テーマに含めるまでには、十年以上を要した。2010年のことである。⁵⁾ ただ、その4年前の2006年に同学会が発行する雑誌『アメリカ歴史学評論 (*American Historical Review*)』は既に「海」をテーマとする特集を組み、海域ごとにテーマを切り分けた史学史論文を、*Forum* 欄に掲載している。そこでは、「海」の歴史を研究する際の方法論上の問題や、敢えて「海」に焦点を当てる学術的意義が議論された。

例えば、「大西洋」の歴史を考える際に、「大西洋」という分析の単位を設定する正当な理由があるのか否か、奴隷貿易の歴史などに代表されるテーマを除いて、「大西洋史」という枠組みがどれだけ有用かという問いを、ジョージ・タウン大学で18世紀大西洋史を講ずるアリソン・ゲイムズ (Alison Games) が問いかけた。⁶⁾ その一方で、厳密な分析の単位としてより、分析の新たな範囲として「太平洋」を緩やかに捉え、そこで活動する海の民や、島々に住まう島嶼民の目から見た多様な太平洋史の可能性を積極的に追求すべきだと、ラトガーズ大学で太平洋史を講ずるマツダ・マツダ (Matt Matsuda) が主張した。そもそも太平洋は、政治的な中心のない世界であって、いろいろな立場の人間が寄り集まって築きあげる柔らかな社会空間である。だから、歴史史料の社会科学的客観性に守られた領域ばかりを扱うアカデミックな歴史家には、太平洋の歴史の本当のダイナミズムは掴みにくい。創作芸術を鑑賞する時のように、歌にも踊りにも目を向け、時には政治的に歴史を語り、発言しなければ、太平洋の歴史を研究する意味はない。そのようにマツダは読者に語りかけた。⁷⁾ 2012年に彼が刊行した *Pacific Worlds* は文化人類学の知見が多く盛り込

⁴⁾ Fernand Braudel, *Mediterranean & the Mediterranean World in the Age of Philip II* (Berkeley: University of California, 1996).

⁵⁾ The AHA Annual Meeting of 2010 in San Diego, Theme “Oceans, Islands, Continents,” <https://www.historians.org/annual-meeting/past-meetings/124th-annual-meeting>.

⁶⁾ Alison Games, “Atlantic History: Definitions, Challenges, and Opportunities,” *The American Historical Review* 111, no. 3 (June 2006): 741–757.

⁷⁾ Matt K. Matsuda, “The Pacific,” *The American Historical Review* 111, no. 3 (June 2006): 758–780.

まれた歴史研究書だが、そこにも同様の主張が展開されている。⁸⁾

アリソン・ゲイムズとマット・マツダの二人の主張の違いは、北アメリカ大陸を挟む大西洋と太平洋という二つの海の歴史の違いに由来するのかもしれない。例えば、15世紀半ばに始まった大航海時代以来、ヒト・モノ・カネの移動の舞台として欧米世界にその存在を知られた大西洋の歴史を把握するには、歴史を構造的に捉える視点がどうしても必要になる。好事家的な海事史に埋没しない広角の視野がその歴史研究には求められるのである。大西洋世界に限って言えば、その時空間の歴史を、trans-Atlantic, Atlantic-rim, sis-Atlanticという三つのレベルに分けて研究することができると、アメリカ近代史家のバーナード・ベイリン (Bernard Bailyn) が2000年代以来主張してきたことは広く知られる。⁹⁾ ここで言う Trans-Atlantic history とは、文字通り大西洋世界を横断する動きに着目する歴史研究であり、これに対し Atlantic-rim history は大西洋を囲む異なる地域の構造的比較を主とする歴史研究を、また sis-Atlantic history は大西洋世界の特定の地域とその周辺後背地域の繋がりを海の視点からミクロに描き出す歴史研究を指す。1998年から2012年までハーヴァード大学で環大西洋史のセミナー (The Atlantic History Seminar) を毎年開催し続けた、ベイリンならではの見解と言えよう。¹⁰⁾ それらの視点はアメリカ合衆国の歴史学界に既に十分に受け入れられ、その流れを交差させた優れた研究が大学院教育の必須読本にまで近年ではなっている。ウイスコンシン大学でアフリカ史を教える歴史家ジェームズ・スイート (James H. Sweet) が描いた、大西洋を跨いだヒトと文化の往還の歴史がその一例である。¹¹⁾

一方の太平洋史についてはどうだろう。大西洋史研究と同じく、太平洋史研究においても、1990年代以来、さまざまな視点から研究がなされるようになった。ただ、大西洋に比べると太平洋は余りにひろく、また、欧米世界から余りに遠いため、ヒトやモノの流れを捉える分析単位としてその存在が歴史家に把握されるまでには、時の経過を待たねばならなかった。逸話の集積として太平洋史を提示するのが1990年代まで研究の主流であり続けたことと、自然環境から生まれるこの太平洋史への制約とは決して無縁ではない。大西洋世界のようにその存在を有機的に認識しにくいのが、太平洋世界なのである。例えば、ペンシルヴァニア大学でグローバル史を講ずるウォルター・マクドゥーガル (Walter McDougall) やタフツ大学で太平洋史を講ずるジョン・カーティス・ペリー (John Curtis Perry) らの研究が、そうした集積史の例になる。¹²⁾ 一方で、各大陸に足場を置く地域ヴィ

⁸⁾ Matt K. Matsuda, *Pacific Worlds: A History of Seas, Peoples and Cultures* (Cambridge: Cambridge University Press, 2012).

⁹⁾ Bernard Baylin, *Atlantic History: Concept and Contours* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2015).

¹⁰⁾ <https://sites.fas.harvard.edu/~atlantic/WorkshopsandConferences.html>

¹¹⁾ James H. Sweet, *Domingos Álvares, African Healing, and the Intellectual History of the Atlantic World* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2011).

¹²⁾ Walter A. McDougall, *Let the Sea Make a Noise. . . : A History of the North Pacific from Magellan to MacArthur* (New York: Basic Books, 1993); John Curtis Perry, *Facing West: Americans and the Opening of the Pacific* (Westport, CT: Praeger, 1995).

ジョンのせめぎ合い、例えばアメリカ太平洋 (American Pacific) とアジア太平洋 (Asian Pacific)、あるいはオーストラリア太平洋 (Australian Pacific) とのせめぎ合いとして、この空間の歴史を構造化する研究もこの時代に出た。「太平洋の世紀」の到来を騒いだ世相がそうした議論の背景にはあったのかもしれない。中国共産党の研究から研究生生活をスタートさせたアリフ・ダーリック (Arif Dirlik) の研究がその代表例となる。¹³⁾

地域ヴィジョンのせめぎ合いには、歴史像の闘いという側面も含まれる。ただ、海洋を取り囲む異なる地点から見た歴史像の競合ならば、大西洋の歴史にも太平洋の歴史にも等しくその流れが認められよう。それでも、太平洋には大西洋には見られない大きな特徴の一つある。島嶼世界の存在である。太平洋には古来よりポリネシア、メラネシア、ミクロネシアの島嶼地域が存在し、欧米各国が進出する遙か以前からヒトと文化の往来が進んでいた。欧米人にとっての太平洋がヒトやモノの流通を阻害し続ける存在だったとすれば、それとは全く異なる太平洋理解をそれら島嶼地域の人々は古来より育んでいたことになる。パプア・ニューギニアに生まれたトンガの歴史家・文化人類学者エペリ・ハウオファ (Epeli Hau'ofa) らがその海洋像を“*Our Sea of Islands*”という言葉で概念化したのが、やはり1990年代のことであった。¹⁴⁾ 要するに、欧米人にとって太平洋は、大西洋とは異なり、想定しなかった歴史主体が登場する未知の空間としての期間が長かったのである。アカデミックな歴史学者がそのダイナミズムを掴みきれない世界とか、政治の中心が無い世界とマッタ・マツダが述べた太平洋世界のそれが特徴であった。ならばそれに相応しい歴史の複数性を太平洋史の前面に押し出せばよい。そうマツダは主張したのであろう。その主張に共振し、アジア太平洋あるいは太平洋島嶼諸地域が世界史に占める位置を問い直す研究が、その数を今も増やしている。2015年にコロンビア大学のガリー・オキヒロ (Gary Okihiro) が刊行した、*American History Unbound*はそのほんの一例に過ぎない。¹⁵⁾

こうして振り返ってみると、2006年の『アメリカ歴史学評論』は大別して二つの問いを読者に投げかけたと言うことが出来る。すなわちその二つとは、歴史のより精緻な構造化と新たな主体の掘り起こしである。そしてこの二つの問いは、その新しさを失うことなく、海の歴史を志す研究者に今も問われ続けていると私は思う。

2. 『船乗りがつなぐ大西洋世界——英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』が語る海洋世界

『アメリカ歴史学評論』の*Forum*における議論を借りて海の歴史が抱える課題を二つ提

¹³⁾ Arif Dirlik, *What Is in a Rim?: Critical Perspectives on the Pacific Region Idea* 2nd ed. (Lanham, Md.; Rowman & Littlefield Publishers, 1998).

¹⁴⁾ “Our Sea of Islands,” in *A New Oceania: Rediscovering Our Sea of Islands*, ed. Eric Waddell, Vijai Naidu, and Epeli Hau'ofa (School of Social and Economic Development, The University of the South Pacific in association with Beake House, 1993), 2–16.

¹⁵⁾ Gary Y. Okihiro, *American History Unbound: Asians and Pacific Islanders* (Oakland: University of California Press, 2015).

示したのは、ほかでもない、笠井俊和の著書が上手にその潮流を掬い取り、答えていると思われたからである。「船と船乗りが織りなしたアメリカ史のページを開こう」(iv, 以下本書からの引用は頁数だけを示す) という言葉で始まる本書の構成は、序章で全体への見通しが述べられた後、大きく二部に分かれている。すなわち第一部が「ボストン船の貿易ネットワーク」であり、第二部が「船乗りの生きる世界」である。言い換えれば、第一部は大西洋史の新たな構造の抽出の試みであり、第二部は大西洋史における新たな歴史主体の抽出の試みと言えらる。『船乗りがつなぐ大西洋世界——英国植民地ボストンの船員と貿易の社会史』という本書の主題と副題も、その二つの試みを言い得て妙である。「つなぐ大西洋世界」という言い回しで歴史の新たな構造化が示唆され、「社会史」という言葉によって今まで等閑視されがちであった新しい歴史主体の浮上が示唆されるからである。そう捉えて、以下、本書の内容を要点のみではあるが、紹介してみたい。

まず序章で、先行研究の動向と本書の狙いを笠井は説明する。そこで彼が本書の要点として強調するのは、「国家主導の探検事業や海軍の英雄への着目とは異なる歴史記述」(1) である。具体的に言えば、17世紀から18世紀初頭にボストンを中心に活躍した船長と水夫を主役とする歴史記述にそれはなる。船長や水夫に着目する歴史研究は過去にもあった。著者が手厚い指導を受けたというピッツバーグ大学のマーカス・レディカー (Marcus Rediker) の研究を筆頭に、体制秩序への異議申し立てを行う集団として船乗りに着目した歴史研究がまずあった。いわゆるニューレフトの研究とそれらと呼んでよいであろう。あるいはまた海洋小説が描くロマンチック、エキゾチックな船乗りのイメージを追った文化史研究も数多く存在した。しかし、笠井はそれらの先行研究のいずれとも距離を置き、「航海と貿易の担い手たる船乗り」(1) の客観的存在に焦点をあて、彼らが(付言すれば本書には女性がほとんど登場しない) 生きた歴史の忠実な再現に力を注ぐ。その際、海洋世界のみならず港を核とする地域社会の経済活動に船乗りが片足を置いていることを改めて確認し、陸と海とに広がる重層的な海洋コミュニティ (maritime community) に生きる集団として、彼らの世界を描き出すことに笠井は力点を置く。(6) 英領植民地時代の船乗りは、生活の必要に迫られて他の職業との間を柔軟に行き来する、弾力的な職業集団であった。その集団の規模やその集団に属す人物の性格、実際に行き来した航路、運んだ積み荷の内容などがこのあと細かく描かれていく。前節で紹介したバーナード・ベイリンの視点を援用して言えば、sis-Atlantic historyへの目配りをしたうえでの斬新な trans-Atlantic history の試みと、本書を言いまとめることが出来るだろう。

その試みを支える主たる史料は、海事局船舶簿 (Naval Office Shipping Lists)、新聞記事、海事裁判所の訴訟記録などである。なかでも、経済史家らが貿易統計の算出などに専ら使用してきた海事局船舶簿の記載から、大西洋貿易の実態を掘り起こすことに本書は力を注ぐ(16-18)。17世紀末に帝国全体の経営引き締めを図った英本国が、北米植民地における交易の実態を把握するために試みたのが、海事局船舶簿を通じた船舶と船乗りの移動の把握であった。それ故その船舶簿には、特定の港を出入りする船舶の母港や船の大きさ、船の出入りの期日、船長の名、船員の数、積荷の内訳等が詳細に記されていた。航海法体制の下で関税を厳しく管理するには、それらの情報の取得が不可欠だったからである。その情報のデータベース化とその集積結果の緻密な解析とが本書の背骨を形成する。実際、ボストンを母港とする交易船の実像がそのデータから次々と立ち上がる。このあと紹介す

るように、史料の解釈は慎重かつ周到であり、しかも、そこから明らかにされた史実は過去の歴史常識を大きく覆すものとなった。その点に鑑みて、本書の学術的価値はきわめて高いと評価できる。

さらに具体的に見てみよう。序章に続く第一部は、4つの章からなる。その前半、第1章「ボストンの西インド貿易」第2章「船長が担う貿易」の二つの章で、我々が長いあいだ信じてきた三角貿易の神話がまず覆される。高校の世界史でも重要事項の一つとして学生が学ぶ三角貿易とは、ヨーロッパと新大陸、アフリカ大陸西岸との三点を積荷が三角の形に移動する貿易のことである。ボストンを母港とする交易船に限って言えば、それは、ニューイングランド・アフリカ・西インド諸島の三点を、ラム酒・奴隷・糖蜜を積んだ船舶が周回するイメージで理解されるものだった。しかし、ボストンとジャマイカのポートロイヤルから英本国に提出された海事局船舶簿の記載を比較検討した結果、船荷そのものは従来のイメージ通りに三角に移動はしたものの、ほとんどの船はその三角形のどこかの一辺だけしか行き来しておらず、その実態はシャトル貿易と呼ぶべきものであったことを笠井は突き止めたのである(36-37)。積荷の運搬と売り捌きが分業化されておらず、船長自らが輸出入の行程全体に責任を負っていたことが、このシャトル貿易の大きな理由であったと笠井は言う。大西洋上を周遊せずに航路を固定化し、交易の回数を増やせば、市場の最新情報は入手し易くなり、航海の安全も得易くなる。それが、海運の利益を上げる第一の条件であったからシャトル貿易が栄えた笠井は考えるのである。船舶簿に記載された船名や船長の名を辛抱強くデータベース化し、各船舶の運航パターンを地道に掘り起こして初めて明らかになったこの史実は、驚きに値する。もちろん、プリストル他の港から出帆する大型の本国船やロードアイランド(ニューポート)を母港とした船の中には、奴隷貿易を底辺とする従来の理解通りの三角貿易に携わった船も少なくなかった。しかし、ボストン船に限って言えば、そもそも船の規模が本国船に遠く及ばず、船員の数も平均7、8名と小規模で、奴隷貿易に携わる船は少なかったという。ボストンとジャマイカとの間を、必要に応じて近隣の港にも立ち寄りつつ、こまめに行き来するのがその貿易の実態だったのである。あのオラウダ・エキアノ(Olaudah Equiano)の自伝に綴られた大西洋世界を行き交う交易船の移動航路をここで思い出してみればよい。¹⁶⁾西インド諸島との交易の「構図」(168)と笠井は控えめに幾度か記しているが、大西洋交易の「構造」の見直し、新たな歴史の構造化の試みは部分的にせよ本書で十分に達成されているとみてよい。嵐や突風等の自然の驚異や海賊船の脅威に晒されつつ、大陸沿岸とジャマイカとの交易に従事したボストン貿易の実態が笠井の手で見事に再現されている。

第一部後半の第3章「植民地の非合法貿易」と第4章「スペイン植民地とのつながり」は、船舶簿の記載の「矛盾」に着目することから議論が起こされる。すなわちポートロイヤルへの入港あるいはそこからの出港の記載が、ボストン港からの出港あるいはそこへの入港の記載と辻褄が合わない船舶が存在すること、積荷の記載内容が両港の間で合致しない船が存在することなどに着目し、公式の書類に記載されなかった交易の存在へと笠井は推理を広げていく。実際、1670年のマドリッド条約や1713年のユトレヒト条約が結ばれた時

¹⁶⁾ Olaudah Equiano, *The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, the African* (1794) (Werner Sollors, ed., Norton, 2001).

代、スペイン領中南米植民地と英領植民地との間には奴隷や織物、食料の取引を含む「スペイン貿易」(143)と呼ばれる密貿易が盛んに行われていた。その実態を二次史料も駆使しながら笠井は炙り出していく。とくにメキシコのカンペチェ湾沿いでイギリスの元バツカニア(海賊)らが展開したログウッドの伐採とその交易の様子、帝国経営上の利益と見なしてその密貿易を黙認した英本国の「有益なる怠惰」(166)など、詳しく知られていなかった交易の実態が明らかにされており、この二つの章の記述は貴重である。その密貿易の存在をスペインと英本国との「共存関係」「共謀」(131、133)と綴る言葉の遣い方には少し違和感を覚えたが、ラテンアメリカ植民地史と北米英領植民地史との思わぬ繋がりを読者はここで学ぶことが出来る。言い換えれば、17、18世紀イギリス帝国の大西洋世界における非公式のひろがりを読者はこの二つの章であらためて確認することが出来るのである。

さて、第二部に入るとその前半の三つの章、第5章「ボストンの船乗り」、第6章「船乗りを取り巻く環境」、第7章「新聞に見る帆船航海」で、ボストン船の船乗りの世界が詳述される。少年時代以来笠井が興味を抱き続けたという(289)船乗りの世界の再現がこの三つの章の内容であり、それだけに笠井の筆致はいかにも楽しげである。ボストンの酒場で給料を浪費する酔いどれの船乗り(193)や船上の辛い仕事からの脱走を企てた船乗り(201)、ハリケーンや疫病の恐ろしさに身を縮める船乗り(219-220)、さらには植民地戦争の間も命の危険を省みず大海原に漕ぎだした船乗り(223)の姿等が生き生き描かれ、読む者を飽きさせない。それらの情報をボストンで発行された週刊新聞『ボストン・レビュー』に丁寧に追った手法も高く評価できる。「船員の社会史」をうたう本書の面目躍如たるところであろう。歴史に埋もれていた船乗り(船長と水夫の両方)の実像を現代に蘇らせるといふ笠井の目論見は、ここで十分に達成されている。

続く最後の二章、第8章「情報を運ぶ船」と第9章「船乗りの語る航海譚」は、少し記述の方向が変わり、情報の運搬に交易船や船乗りが果たした役割と、陸の人々に人気を博した「航海譚」の社会的機能が分析の遡上に登る。郵便制度が公式に確立していない17、18世紀、洋上を行き交う交易船とその船長は、酒場やコーヒーハウスで集荷される書簡や新聞その他の刊行物の運搬役として、重要な役割を果たしていた。その情報のネットワークは、本国イギリスのロンドンやブリストルを起点に、西インド諸島、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアを包み込み、さらには北米植民地沿岸の小さな港をも内包する文字通り環大西洋全域に広がっていたという。植民地時代の新聞誌上には、交易に必要な市場の状況に関する記事が数多く掲載された。それらの新聞史料を実際に読んだことのある者なら即座にその事実思い当たるだろう。そうした様々の情報が各種刊行物や時には船乗り自身の口を通して流布した歴史を、ここで読者は学ぶことが出来る。ただその情報の流れが、メトロポールから周縁へという一方向的なものではなく、情報の受け手が、複数の情報を比較対照しながら取捨選択する双方向的なものであった点を笠井は強調する(253)。そうした情報の構築の過程に海洋コミュニティ生成のダイナミズムが宿る。情報は発信する側だけでなく受け手の側のニーズに沿う形で、その形態や性格を変えていったのである。

実際、第9章「船乗りの語る航海譚」で扱われる「航海譚」も、情報の発信者と受け手の二者、すなわち洋上での体験を語る船乗りとそれに耳を傾ける者たちとの間で、必要に応じて脚色され、消費される性質を持っていた。「航海譚(yarn)」と総称されるその話には、非科学的なものを含めた奇異な体験がよろず含まれ、海賊船や敵船との遭遇、難破などの

苦勞話から、珍しい生き物や南の島の風変わりな文化との遭遇、はては幽霊船の出没を含んだ怪談にまで話が及んだという。陸に暮らす人々にとってそれらの物語の内容は物珍しく、また恐ろしげでもあり、脚色豊かな娯楽性故に、多くの人々の人口に膾炙するものが多かった。巨大な鯨や紳士的な海賊の話等、現代に語り継がれる話も少なくない。しかし、肝心なのはその内容ではなく、その役割、社会的機能だと笠井は言う。すなわち、地理学的にも気象学的にも海に関する知識が十分でなく、人知の及ばぬ恐ろしい空間と海洋が人々に信じられていた17、18世紀にかけて、そうした海洋譚には、少しでも人々の海への不安を和らげ、その世界を生き抜く知恵を伝達する役割が担わされたのだと笠井は考える(277)。それが「海を少しでも飼い馴らす」知恵(274)になったとも笠井は言う。田中きく代等が編集した既述の『海のリテラシー』が語る概念をおそらくは援用したこの解釈は、本書に海洋文化史の豊かな奥行きを与えている。

ボストンとジャマイカとのシャトル貿易の構図を明らかにし、船乗りの日々の生活を活写したのち、その世界で語られる不可思議な物語が海から遠くはなれた陸地に生きる者にも共有される経緯をたどり、笠井の「船員と貿易の社会史」は一つの完成をみる。例えば、19世紀を主とした英米における海洋意識の変容をたどった研究に、ヘレン・ロズワドウスキー(Helen M. Rozwadowski)の研究がある。笠井の研究にはそれらの研究にも通じる身幅がある。¹⁷⁾ 社会史から海洋文化史へと、ボストン船の研究を大きく広げることに笠井は果敢に挑戦し、成功を取めた。

3. 海のアメリカ史の可能性と課題

2006年6月に『アメリカ歴史学評論』が問うた海の歴史の二つの課題に笠井の作品が上手に取り組み、一定の答えを出していることは、以上に見た通りである。海の視点から見たアメリカ史としてその成果をおおいに顕彰したい。

しかし、その上で、という条件付きの問いを最後に出し、本書の論評を締め括りたい。ハーヴァード大学でイギリス帝国史を講ずるデイヴィッド・アーミティッジ(David Armitage)が、海の歴史研究を近年立て続けに編んでいる。*The British Atlantic World, 1500–1800* (2009), *Pacific Histories* (2013), *Oceanic Histories* (2017)がその3冊である。¹⁸⁾ 大西洋、太平洋、世界の諸海洋、とそれぞれに対象は切り分けているが、学生や研究者へのリサーチガイドの意味も含むこれらの論集でアーミティッジが提示した視座は、これからの海の歴史を考える上で示唆に富む。そもそも彼が編んだ3冊の論集は、政治、経済、科学、人口動態、哲学など、さまざまな位相に分けて当該海域の歴史を提示してい

¹⁷⁾ Helen M. Rozwadowski, *Fathoming the Ocean: The Discovery and Exploration of the Deep Sea* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2009).

¹⁸⁾ David Armitage and Michael Braddick eds., *The British Atlantic World, 1500–1800* (New York: Palgrave MacMillan, 2009); David Armitage & Alison Bashford eds., *Pacific Histories: Ocean, Land, People* (Red Globe Press, 2013); David Armitage, Alison Bashford, and Sujit Sivasundaram eds., *Oceanic Histories* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017).

る点にどれも特徴がある。言い換えれば、さまざまな異なる位相に海の歴史がまず存在し、その集合体として海洋の全体史が把握されることを彼の論集は示唆している。2013年と2017年の論集のタイトルに複数形の histories という語が含まれているのは、そうした彼の歴史観を裏付けよう。たしかに、マイクロな歴史事実を束ねればマクロな歴史像が得られるかもしれない。各論の積み重ねの上に全体像が獲得されるというのは歴史理解の一つの真実だからである。だがその一方で、どれだけマイクロな史実が積み重ねられても、その各パーツをつなぎ合わせる定式、あるいはパラダイムの把握がなければ、マクロな歴史像は獲得され得ない。それもまた、歴史理解の真実である。その二つのベクトルのバランスを海の歴史はこれからどう取ればよいのだろうか。グローバル・ヒストリーの潮流をハーヴァード大学で牽引する一人であるアーミティッジらしい、海の歴史研究への大きな問いかけがこれら3冊の論集には含まれていると私は思う。

そして、最後にやや辛口に言えば、上に述べたのと同じ問いが笠井の作品に対してもなされなければならないと私は思う。本書の序章で笠井自身が強調したとおり、ナショナル・ヒストリーの枠組みからは「排除」されてしまう歴史主体としての「船乗り」に着目し、「国家主導の探検事業や海軍の英雄に着目するのは異なる歴史」を記述することに、笠井は見事に成功している。そこから新たな知見が次々と開けたことは、すでに確認したとおりである。海事局船舶簿を史料に「近世大西洋世界における地域間のネットワークの実像」(67)が新たに浮かび上がることを、我々は心地よい興奮とともに確認した。海の歴史の新たな可能性を存分に笠井は示してみせたと評価しなければならない。しかし、例えばその新たなネットワーク像が従来指摘されていた大西洋世界のネットワーク像とどのように繋がるかは、研究者個々の努力に依然として委ねられている。海から見る歴史の水平線が陸を起点に見ていた従来の歴史の地平線とどのように交わり、いかなる歴史像を新たに結び直すかは、個々の研究者の努力に委ねられたままなのである。笠井が明らかにした交易のネットワークは、別の種類のネットワーク——政治的、文化的、人的——とどのような形で繋がるのか。ないものねだりを承知で述べるならば、その統合の試みにもう一步踏み込んだ議論が含まれていれば、本書の学術的価値は飛躍的に高まったであろう。ナショナル・ヒストリーを越える海の歴史は、陸の歴史を忘れてよいわけではない。『海のイギリス史』で編者の金澤が示唆するとおり、海の歴史は国家の歴史を掻き消すわけでは決してない。新たな歴史像の統合への国家の歴史を誘うだけである。¹⁹⁾ならば、その行方を追う仕事が彼らに続く歴史家に残されている。

あるいはまた、新聞や訴訟記録を史料に見事なまでに掘り起こされた船乗りの世界の実像が、いままで等閑視されてきた歴史主体の掘り起こしに繋がったことは十二分に理解できた。しかし、その新たな実像はいかなる「アメリカ史のページ」をさらには切り開くのであろうか。例えば、北米植民地における海運以外の経済活動を笠井が行ったのと同様の緻密さで再構成し終えた後、水夫の仕事は社会全体のどこに定直し直され得るのだろうか。社会道徳的な有害性を水夫が有したことが事実だとして、その有害性を相殺するのは、笠井が言うように、貿易活動における彼らの経済的な有用性だけであったのだろうか。奴隷

¹⁹⁾ 金澤、前掲書、6-7頁。

労働や女性労働が織りなす労働世界全体で彼らが担った役割は、彼らの有害性をどのように相殺し得たのだろうか。そもそも海賊に身をやつすことに躊躇いを示さない者もいたという「船乗り」(267)の集団的属性が、どこかまだ曖昧なまま本書の議論は閉じられていないか。要するに、新しく手にした水夫の実像が旧来の水夫像をどのように包摂し直すのか、その行方は個々の研究者の努力にやはり委ねられたままという印象が私には残る。

当たり前のことだが、結局、笠井の示した成果を受け止め発展させる仕事は海の歴史研究に漕ぎ出す次の歴史研究者の手に委ねられている。そのことをあらためて確認し、この優れた研究への論評を締め括りたい。